II-1

福岡の蘭学（医学）

奥村　武

1、博多の医師の町

福岡藩政後期、博多の町の中に『医師の町』が形成されていた。その所は今日の博多区、大博大通りと昭和大通りが交叉する附近である。戦前は上市小路、下呉服町と呼ばれていたところ。その地には小児専門（児科）の病院と施薬園を聖福寺境内につくった津田元顧・元貫父子。津田家の南にはシーボルトの高弟、百武萬里（ひゃくたけばんり）。続いて蘭方外科医阪巻文慶、阪巻道慶。同じく岡村了渓。華岡青洲の門人で後に席田（むしろだ）の立花寺（りっかじ）で塾を開く。津田家の向いは蘭方産科医の藤野良泰が萬里の家に寄宿するシーボルトの門人武谷元立、緒方洪庵の門人武谷祐之が居た。これらの優秀な多数の西洋医（蘭方医）の開業医が城下町でなく商家の多い町の中に何故形成されたのであろうか。それは小野蘭山も絶賛する程の生薬学者内海蘭渓が経営する屋号蔵屋という大きな薬種商で、同町にくすりの研究所とも云うべき、千二百坪以上もある御薬園所が蘭方医達の魅力であり、医師の町の出現する大きな力であった。

2、生薬学者内海蘭渓

蘭渓の三人の娘の婿にそれぞれ、生薬の薬効を試験するため蘭方外科医阪巻文慶に、御薬園奉行肥塚小八郎に、薬用植物を記録写生する画工の中村伊八によって『本草正画譜三十冊』蘭渓のライフワークが完成した。この薬園は藩の保護を受け、全国の生薬学者も知るところであった。内海家には名古屋の生薬学者大河内存真は長崎の鳴瀧塾留学の帰途、博多の内海家の薬園に立ち寄り、又西南戦役のとき軍医総監松本良順も訪れて研修したという。

3、阪巻文慶と阪巻道慶が蘭方外科医塾を開く

博多の医師の町の中に長崎のシーボルトの鳴瀧塾よりも、又大坂の緒方洪庵の適塾よりも早く蘭方外科医塾が開かれていたことは、当時の博多が西洋医学を掌握して

いたことに驚くべきことである。阪巻文慶が寛政七年（一七九五）頃開塾し、道慶が死去する嘉永初年（一八四八）頃迄、阪巻の蘭方外科医塾が開かれていた。入門した医師は入門帳を見ると近畿以西が多く、入門の際に医師が守るべき道に対し誓いの言葉に、入門年月日、住所、氏名、花押をみることができる。蘭方医塾の運営費は内海蘭渓によるものと想像できる。

阪巻道慶の没後、百武萬里が継承したものと思われる。百武塾になると死体解剖を自宅で実施、刑死体の系統解剖でなく病理解剖に発展する。

阪巻家は家祖より医師ではなかった。先祖の理右エ門は朝鮮の陣に出陣して負傷し、次郎右エ門は天草の陣で病となり益々重くなり、その苦しみを見かねた阪巻太兵衛は医師を志し長崎に遊学し、蘭方外科術を学びはじめて家業とした。太兵衛の妹、小女郎は南蛮流外科、栗崎道悦の門人、塚本道庵の妻となる。道庵の数代後の道甫は緒方洪庵の門人となる。道甫の孫が塚本赴夫（福岡大学薬学部）、憲夫（国立東京がんセンター）である。道庵は藩主黒田光之の脱肛の手術に成功し、黒田綱政公より三百石の禄を受く。ここに博多の蘭方外科医塾を報告する。

（奥村内科医院・福岡市博物館協議会委員）